

「感動と安全を伝えたい」

まず、ウクライナ情勢の平和的解決と新型コロナウイルス感染の終息を強く願いたい。

このような状況下で行われた北京オリンピック・パラリンピックが13日終了した。様々な競技で力の限り競い合う選手の姿に感動し、コロナ禍で孤立を感じる我々の心に、共に喜びを分かち合い涙するという、忘れかけていた感情を呼び戻してくれた。きっと多くの子どもたちにとって競技を始めるきっかけにもなるに違いない。

さて、今大会でも力を尽くした戦いがくり広げられた。

女子では37名が欠場したが、補欠決定戦における荒川朋花選手、高野綺海選手のはつらつとした元気な姿が特に印象的だった。ベスト4はコマツの選手が独占した。試合ではお互いに真剣な表情だったが、試合後は仲のいいチームメイトに戻っていた。4選手には、それぞれどのような性格なのか、お互いに語ってもらった。

富田若春選手：その場にいるだけで皆が笑顔になれる面白い人。

西願寺里保選手：常に周りに気遣いができる優しい人。

泉 真生選手：とても真面目な陰の努力家で強い人。

結城彩乃選手：笑顔が似合う明るい人。

全国大会でも大いに活躍してくれることを願っている。

男子では、斉藤立選手が大活躍した。初戦を抑え込みで一本勝ちし、その後は内股が冴えて、安定した試合ぶりだった。決勝戦では見事な足車で一本勝ち。全国大会での活躍を期待したい。

さて、前回の東京都選手権（2021年10月31日）のコメントで、醍醐敏郎先生のご逝去に触れたが、同じく十段の安部一郎先生が2月27日にご逝去された。ヨーロッパを始め、各国で精力的に講習会を行った先生である。筆者もかつて学生を連れてフランスに遠征したことがあるが、現地では皆熱心に稽古をしていたことを思い出す。そうした背景には、阿部先生の普及努力があったことを忘れてはならない。

さて、多くの諸先生方のご尽力により海外では柔道の競技人口は飛躍的に増えたが日本においてはどうか。

日本における高校の運動部活動の登録人数について、2003年を100%としたときの2019年度の増減率をみると、増加している競技と減少している競技の2極化が進んでいることがわかる。（『朝日新聞』朝刊、2021年10月23日、17面参照）

増加しているのは、バドミントン（男子161%・女子102%）、水泳（男子130%・女子97%）、卓球（男子111%・女子123%）、陸上（男子112%・女子118%）である。

一方、減少しているのは、柔道（男子49%・女子56%）、空手道（男子46%・女子62%）、剣道（男子65%・女子64%）、体操（男子55%・女子65%）である。

増加と減少の競技を比べると、どちらも個人競技という点では共通している。減少傾向にある競技に対しては、怪我をするのではないか、痛いのではないかというイメージが強く、不安や恐怖心があるのではないだろうか。

そうであれば、我々柔道関係者は、柔道が「安全」であることをさまざまな方法で発信していかなければならない。例えば受け身を覚えれば日常生活においても生涯怪我のリスクを減らしてくれるなど、草の根レベルで安全性を認知してもらえることが必要なのかもしれない。

柔道は楽しい。そして安全である。普及のために、柔道の「感動」と「安全」をこれからも伝えていきたい。

（広報委員会副委員長 大坪宏至）